

上郡町の偉人

大鳥圭介

「鵬程万里」第四回

著者 中川由香

江戸末期の一八六二年(文久元年)に官板バタビヤ新聞が最初に発行されて以来、各種新聞が日々情報を伝えていきます。新聞に見る大鳥圭介の姿は、枚挙に暇がありません。当時の新聞における圭介の存在感を、一部ご紹介します。(文章は適宜現代語に変更)

戊辰戦争では例えば、慶応四年閏四月二十日の東西新聞は「大鳥圭介、脱走の後はずます兵士を募り北軍の為に粉骨砕身し力を尽くし、自ら隊下の兵を引率、常に奇計を行って官軍を悩ませた」「全体先生(圭介のこと)の人となり沈勇にして大度あり、かつ文武兼備の人なので当時の豪傑といふべき」等、旧幕府・会津軍の圭介の活躍を喧伝しました。

明治政府に出仕後、タイから帰国の際、明治八年四月九日の朝野新聞は「大鳥圭介、川路寛堂二名は、本年一月欽命により、暹羅国公使と共に暹羅国に行かれた。暹羅政府は殊に丁寧に接遇し、国主も親しく彼らを招見した。使節の事が終わり、同国バンコクより開帆、去る七日帰朝した」タイに日本から公式に来訪したのは圭介が初めてでした。圭介は「暹羅紀行」でタイの国情を詳細に本邦に紹介しました。

十年六月十四日東京日日新聞「有名な大鳥圭介、荒井郁之助、化学土木鉦山の諸先生が申し合わせ、数々の工業を丁寧に編纂し欧米の新発明も登録して工業新報と名づけ、二週間に一回ずつ刊行。昨日第一

号が発売」と、圭介らが刊行した工業新報が報じられました。十二年二月二五日東京日日新聞では「工業新報に大鳥如楓君(如楓は圭介の号)の製茶説が掲載された。製茶家のために抄出する」と、日本茶の中国や西洋茶との違い、焙煎法、品位、価格、輸出入法について圭介の論考を紹介しています。十三年十一月二五日東京日日新聞では「糖蔗青年会は頗る盛ん。大鳥圭介君は精糖機械の説を演説」と、日本では新規の精糖技術にも圭介が携わった事が伺えます。

十九年四月十六日東京日日新聞は「大鳥元老院議官は学習院長を兼任。演説で『私は諸氏を薰陶する重任を負い、学習院の為に務め励み従事することを誓います。諸氏も国家のためにますます勉勵される事を望みます』と懇諭された」と紹介しました。

十九年十一月六日時事新報。英国船ノルマントン号が和歌山沖で座礁沈没、英国人船長や乗船員は助かった一方、日本人船客二十三名が全員死亡した事件が発生しました。「欧米諸国で同様の災難が起れば、新聞紙は号外を刷り社会の公論を促し後の訓戒とするはず。しかし我が国の新聞はこれを一般の出来事とみなすなど、無情冷淡卑屈だ。切齒に堪えない」と圭介は新聞の批判を当の新聞に投稿しました。これは、不平等条約改正の世論を大いに高めました。日清戦争では、全権公使の圭介の内政改革を始め

とした朝鮮の動向が連日報じられ、国民は圭介に注視しました。二七年十一月二七日東京日日新聞「碧血会他五団が大鳥圭介氏の帰朝を祝う歓迎会。榎本武揚は『人心を發揮し永く東洋の平和を維持する難局で、毅然として一刃兩断よく機宜を制し公使の重任を果たした』と褒辞。対し大鳥前公使は『それは私には相当しない、今回の事は職務上の事で公言できない事もあるが。結果は天皇陛下下の威稜と皆の一致した力による』と述べ一同万歳拍手喝采」圭介の公使の辛い立場での苦難がその謙遜に伺えます。

三十五年五月八日奥羽日日新聞「本邦紳士の体重」は、圭介の体重が十四貫三百四十目、身長四尺九寸(五三・八kg、一四八・五cm)と記載。明治の男性の平均身長は一五八cmなので、豪傑と評された圭介は当時でも相当小柄だったと分かります。

三十五年九月三十日、国府津の津波で圭介が被災。「男爵は来客中だった。対話中激浪の襲来に遭い、辛うじて客と共に一命を取り留めた」とあります。

四十四年六月十六日、圭介の訃報を各新聞が伝えました。東京毎日新聞は二千名が参列した葬儀の写真と共に「大鳥氏は我国の工業界に大に貢献し、工業界の今日の隆盛は確かに大鳥氏に負う所が多い」と記載。「大鳥男爵の面影」として記者が生前の圭介の別荘に参じた際に地元の老人や庭師に二度も間違えた逸話を述べ、圭介を追憶しました。東京朝日新聞は、圭介と坪井塾同窓の加藤弘之博士の「洒脱の老將軍」、圭介と欧米視察を共にした安藤太郎の「大鳥男爵壯年の洋行」など回顧談を掲載しました。

このように圭介の人生の節目がいかにか世人に受け止められたか、当時の新聞は鮮やかに語ります。